

第7節 近世以降の調査成果

1 概要(第212図)

近世以降の遺構には、近世墓と考えられるSK60・61・62、近現代まで使用されてきた、用水路と考えられるSD2～6・SD14・SD16・SD22、水田1・2がある。その他、性格不明の溝SD7・SD23・SD25・SD26がある。

また、遺物包含層(灰褐色土・造成土・1区整地土)中では、弥生時代から近世にかけての多量の遺物が出土している。

2 近世墓

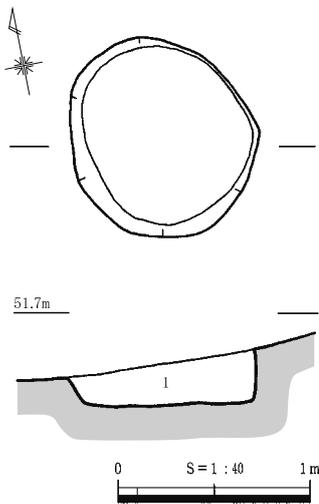
SK60(第213図、PL.33)

1区北西側のa2グリッドに位置し、標高51.4m付近の緩斜面上で検出した。南西にはSK61が近接する。

平面形は不整形円形を呈し、長軸1.03m、短軸0.96mを測る。断面形は不整形台形を呈し、深さは最大0.26mを測る。底面はほぼ水平である。

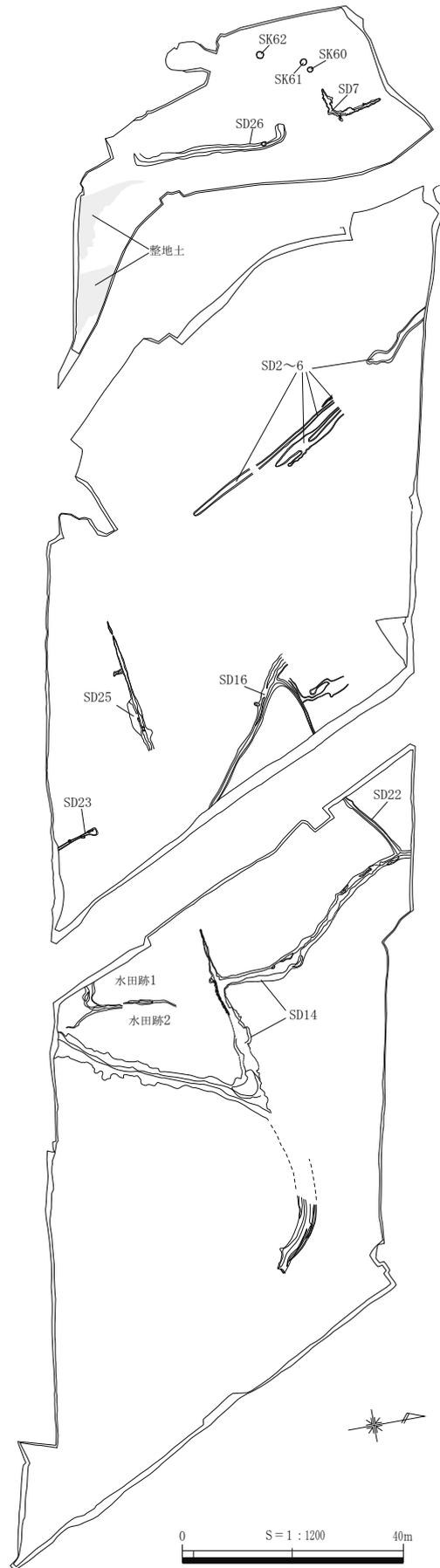
埋土は褐色でしまりが弱く、他の遺構よりも新しい印象を受ける。また、埋土中に白い粉状のものを含んでおり、骨粉の可能性がある。

遺物は出土していないため、明確な時期は不明であるが、埋土の状況及び形態的な特徴から、近世以降の墓の可能性はある。



1 褐色土(10YR4/4 植物の根多含、白い粉状のものを含む(骨片か)、しまり弱い)

第213図 SK60



第212図 近世以降遺構分布図

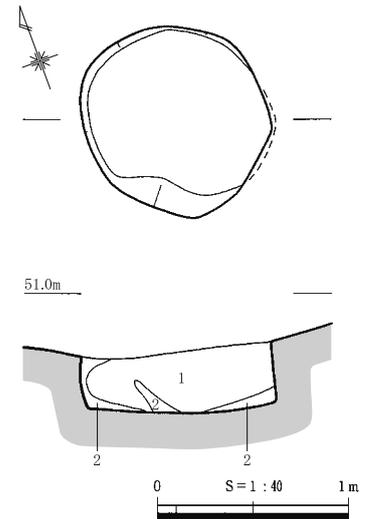
## SK61(第214図、PL.33)

1区北西側のa2グリッドに位置し、標高50.7m付近の緩斜面で検出した。

平面形はほぼを呈し、長軸1.01m、短軸0.99mを測る。ほぼ長方形の断面を呈し、深さは最大で0.33mを測る。底面はほぼ水平である。

埋土は、暗褐色を主体とし、しまりが弱い。

遺物は出土していないため、明確な時期は不明であるが、近接するSK60と規模や特徴が似通っているため、近世以降の墓の可能性はある。



- 1 暗褐色土(10YR3/4 3cm以下の地山ブロック含植物の根多含、3cm以下の地山ブロック含、しまり弱い)  
2 褐色土(10YR4/4)

第214図 SK61

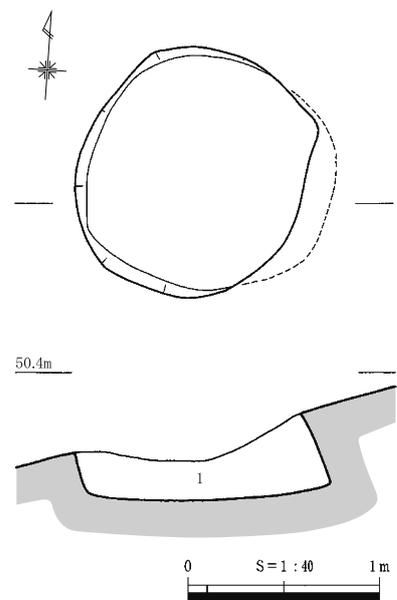
## SK62(第215図、PL.33)

1区西側のa3グリッドに位置し、標高50.0mの緩斜面上で検出した。

平面形は不整形円形を呈し、長軸1.32m、短軸1.17mを測る。東側の壁がオーバーハングしており、袋状の断面形となっている。深さは最大で0.43mを測る。

埋土は、褐色土でしまりが非常に弱い。このような埋土の特徴はSK60、SK61と共通する。

遺物は出土していないが、本遺構も近世以降の墓の可能性はある。



- 1 褐色土(10YR4/4 植物の根多含、しまり弱い)

第215図 SK62

## 3 溝

## SD2・3・4・5・6(第212・216～218図、PL.68・72)

3区の中央よりやや西側を南北に直線状に延びる溝である。

検出した長さは90mで、幅はいずれも1～2m前後である。深さは30cm～1mほどで、底面は凹凸があり、一定しない。

埋土は灰褐色系のシルト質細砂である。

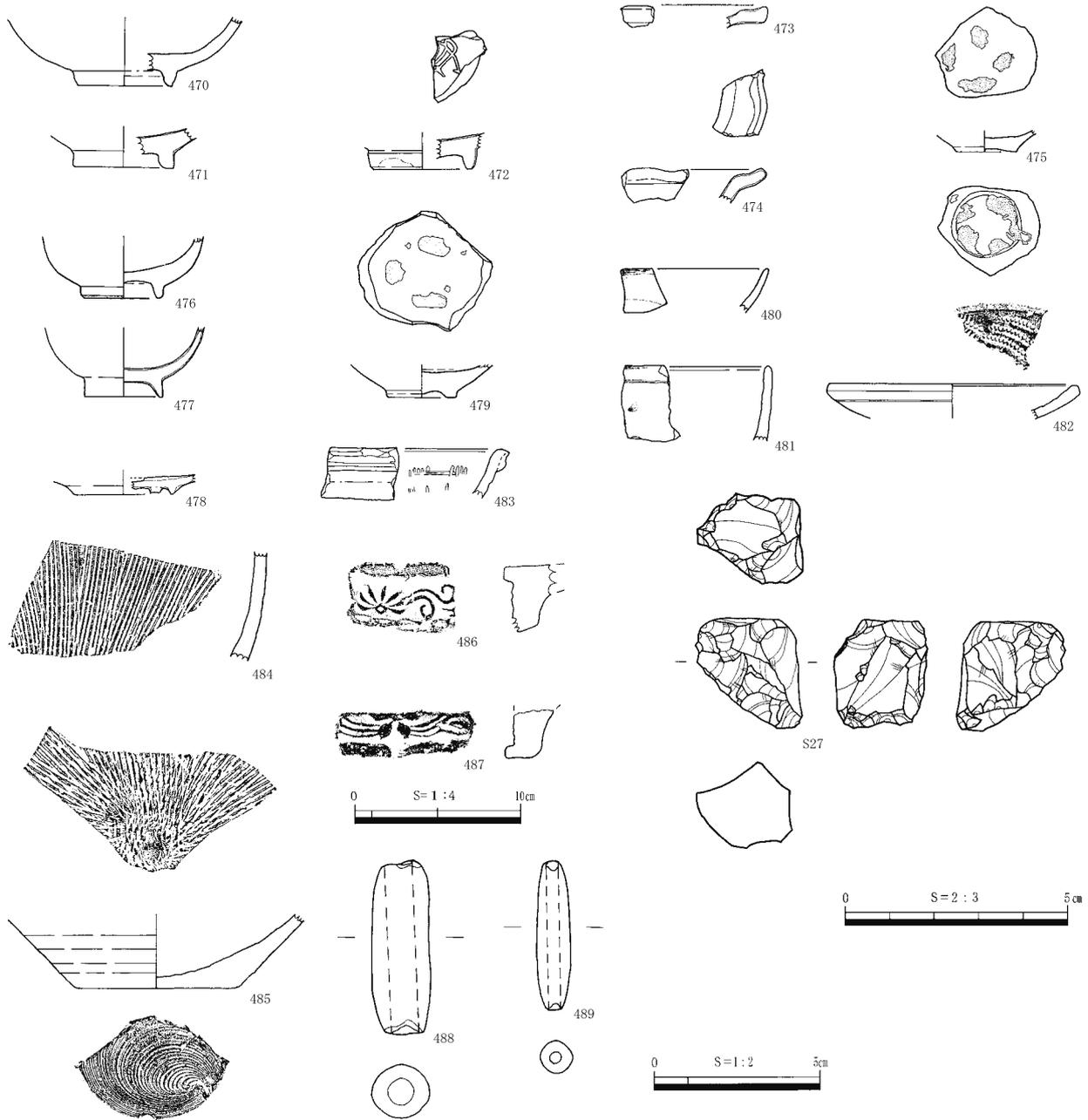
遺物は埋土中から中世から近・現代にかけての土器・陶磁器類が多く出土し、中世に帰属する資料を中心に図化した。

SD2では、青磁碗470～472、青磁盤473・474、朝鮮陶器碗475、陶胎青磁碗476、瀬戸・美濃焼碗477、瀬戸・美濃焼端反皿478、唐津焼碗479、染付け碗480・481、陶器卸皿482、須佐焼播鉢483～485、軒平瓦486・487、土錘488・489、黒曜石製石核S27を図化した。470～475は輸入陶磁器で、470～473は龍泉窯系碗である。478は大窯第1、または第2段階の資料と考えられる。

SD5では、青磁碗490・491、瓦質土器羽釜492を図化した。490は龍泉窯系碗DかE類、491は龍泉窯系碗D類である。

SD6では、青磁碗493、土師質土器坏494を図化した。493は龍泉窯系碗DかE類である。

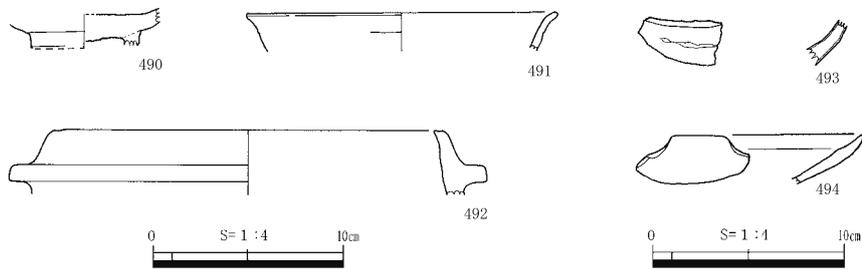
遺物の帰属時期には幅があるが、圃場整備前における用水路跡と考えられる。調査時は削平により遺構が断続的に検出されたことから溝毎に遺構名を振ったが、本来、同一の水路跡と考えられる。



第216図 SD2 出土遺物

SD7 (第212・219図、  
PL.65)

1区北側Z1・Z2 グ  
リッドにあり、標高51.5  
～52.5mの西側斜面部に  
立地する。SX4を掘削し  
ている。



第217図 SD5 出土遺物

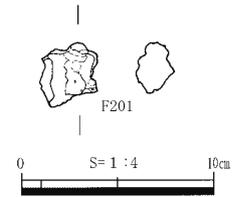
第218図 SD6 出土遺物

当遺構は、逆L字形に走る溝で、長さ13.8m、幅0.4～1.2m、深さ0.1～0.25mを測る。屈曲部あたりでSX4と切り合う。底面の凹凸が著しいが、道路状遺構であるSX4とは異なる。

埋土は13層に分層できた。いずれも黒褐色から暗褐色系の埋土である。

出土遺物は、極小の椀形鍛冶滓F201を図化している。

中世のSX4を掘り込んでいることから、中世以降と推察されるが、詳細な時期は不明である。用途は不明である。



第219図 SD7出土遺物

#### SD14(第212・220～223図、PL.32・64・67・72～74)

4区西側、標高56.5～58.5mの谷部の斜面から平坦面に立地し、ハードローム層と谷部堆積土の境となる。

調査区内での流路はS字状に蛇行している。南側調査区外から北東方向へ流れ調査区中央付近でSD15上層を掘り込んだ溝と合流し西へ向きを変えた後、西側から続く細い溝と合流し再び大きく曲がって北西方向へ向かい北側調査区外へと続く。全長99.8m以上、最大幅1.45m、検出面からの深さは最大で1mを測る。

埋土は黒色、黒褐色土が主体となる。砂層が入ることから流水状況にあったと考えられる。また土層断面において何度か掘り直されていることを確認した。

当遺構の南半では部分的に護岸とみられる杭や丸太、石が壁面に沿うように検出された。SD15上層の溝との合流地点は幅約5m、深さ最大1.8mほどに掘りこまれ、溜池状になっている。この部分ではSD15上層の溝とSD14の境に石組みが見られ、堰であった可能性がある。

遺物は、いずれも砂質の埋土中から出土しており、土師器坏495、須恵器高台付碗496、青磁香炉497、白磁碗498～500、青磁碗501～503、瀬戸・美濃焼碗504、瀬戸・美濃焼天目茶碗505、瓦質土器羽釜506、東播系須恵器鉢507、備前焼播鉢508～510、染付け碗511、陶器512～515、須佐焼播鉢516～519、軒丸瓦520、土錘521～526、硯S28、砥石S29・S30、黒曜石調整剥片S31、宝篋印塔笠部S32、五輪塔火輪S33～S40、水輪S41～S45、地輪S46・47、流動滓F202、椀形鍛冶滓F203～F206、鑄鉄鍋片F207、煙管吸い口C9を図化した。図化していない遺物には、現代のものも多く含まれる。

遺物の帰属時期には幅があるが、周辺で近世の水田が検出されていることから、近世以降圃場整備前まで使用されていた用水路であると考えられる。

#### SD16(第212・224図、PL.68)

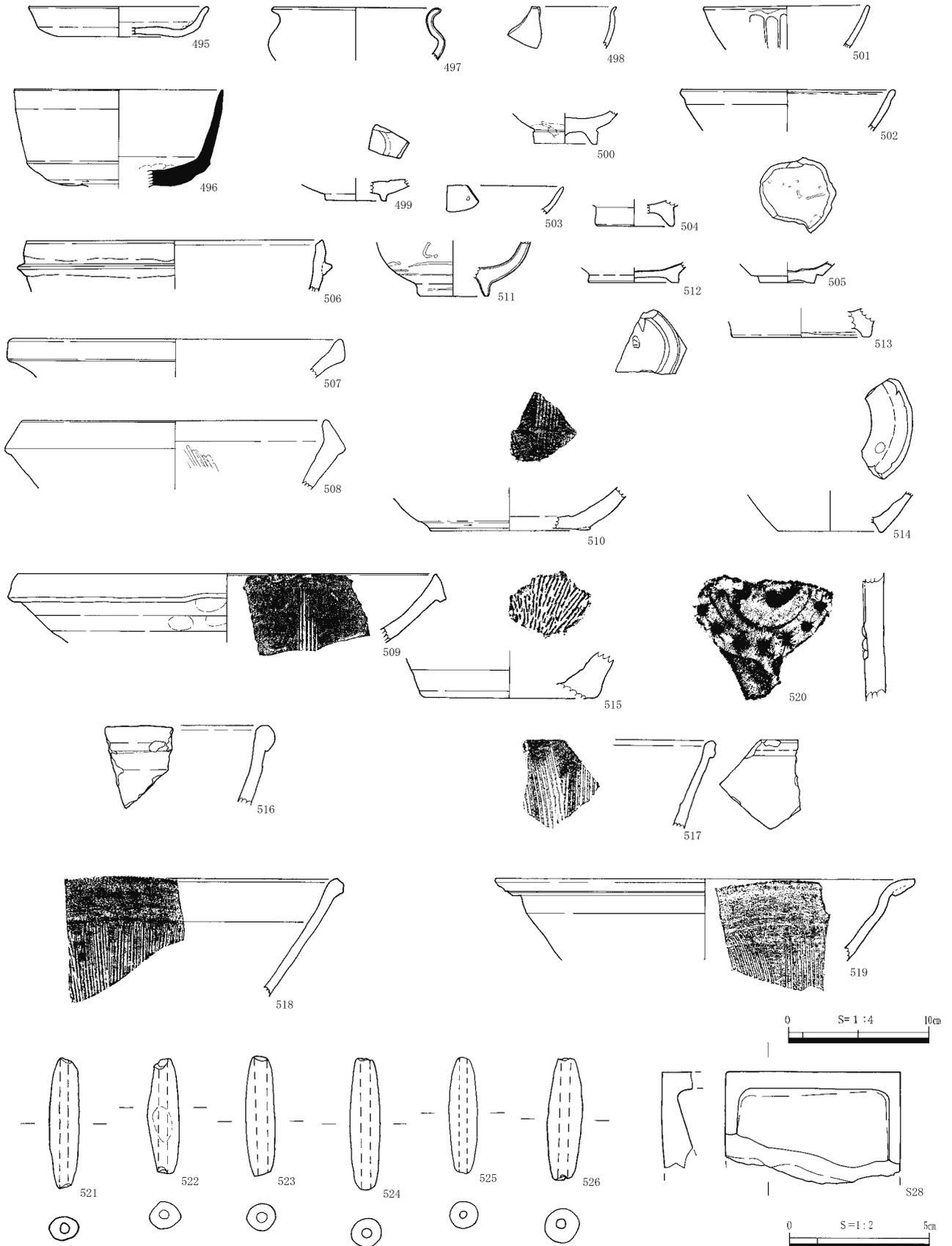
3区の東側、標高56.7～57.5mの谷地形へと下る斜面の肩部に形成された、圃場整備前の水田の用水路跡と考えられる。

検出した長さは30mで、南東から北西方向に延びる。北端は削平され、南端は調査区外へと延びる。北側は東西方向の溝が分岐しており、4区で検出されたSD22に繋がると考えられる。幅は1m前後で、深さは最大0.6mを測り、断面形は逆台形状を呈する。

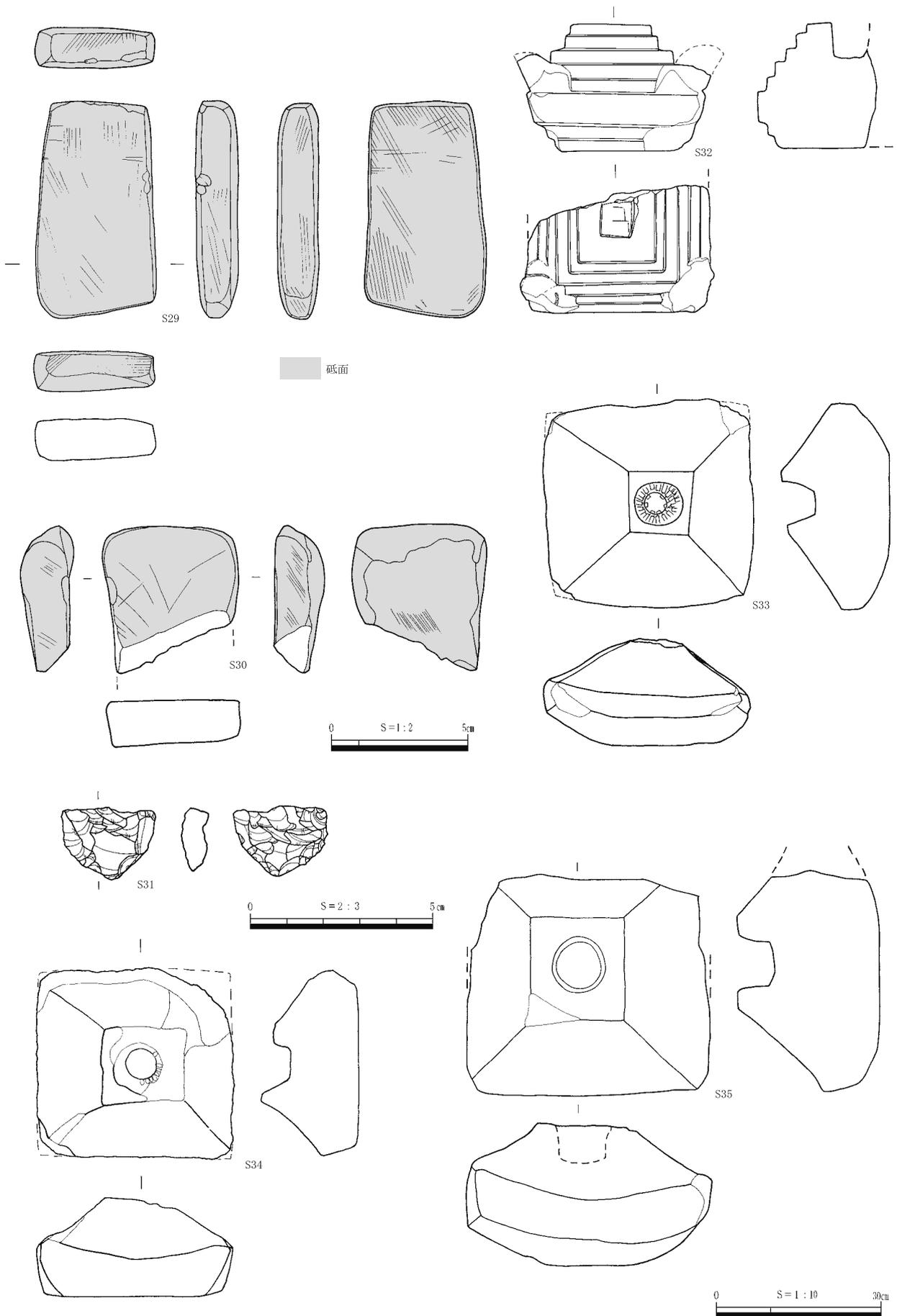
埋土は灰褐色系のシルト質細砂である。

遺物は埋土中から中世から近・現代にかけての土器・陶磁器類が多く出土し、ここでは中世に帰属する資料を図化している。527は土師質土器小皿、528・529は瓦質土器羽釜、530は瓦質土器鍋である。531～533は輸入陶磁器で、531は褐釉陶器四耳壺の底部、532・533は白磁碗Ⅷ類である。

遺物の帰属時期には幅があるが、近現代の遺物も含まれており、近世以降、圃場整備前まで使用されていた用水路であると考えられる。



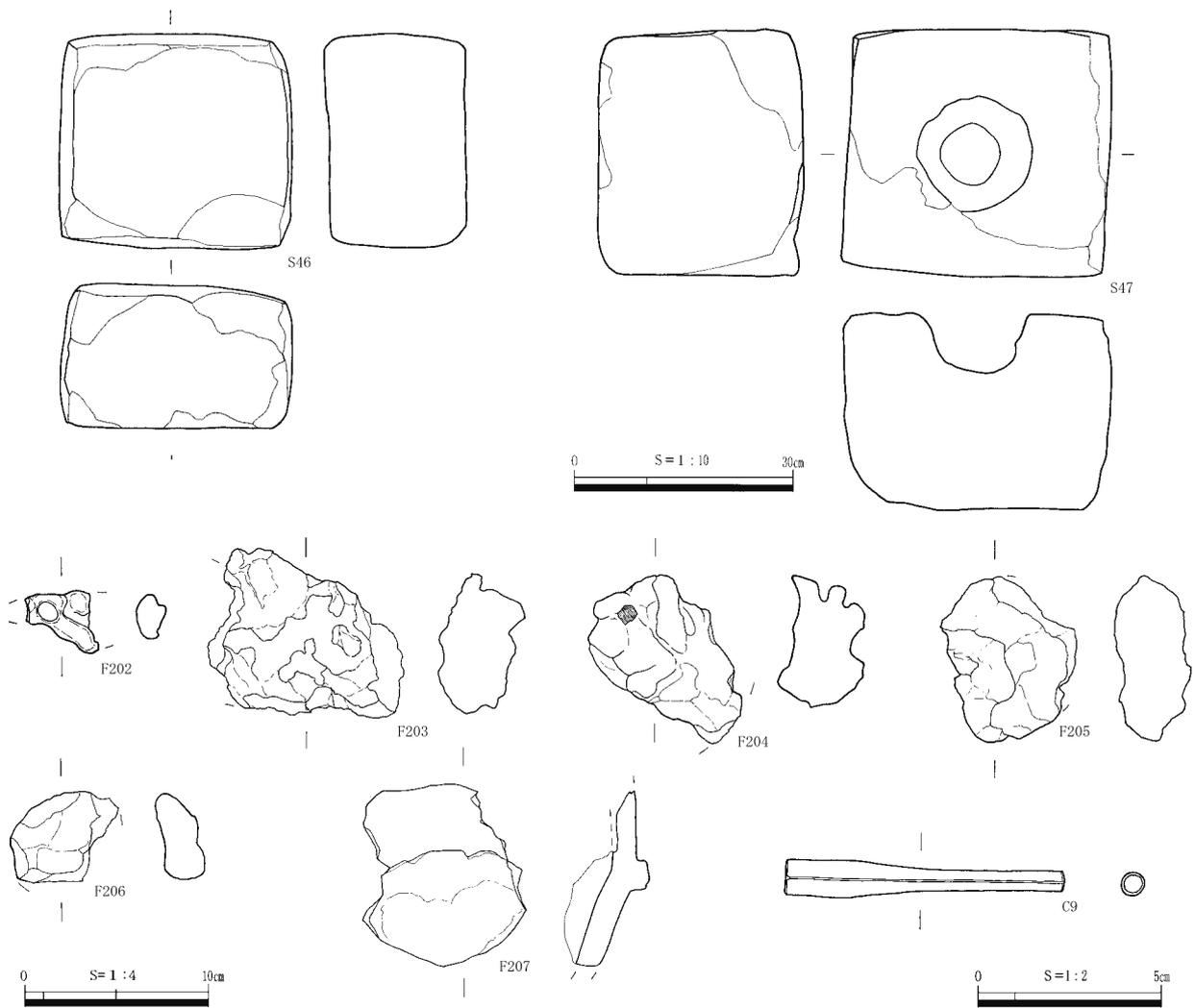
第220図 SD14出土遺物(1)



第221図 SD14出土遺物(2)



第222図 SD14出土遺物(3)



第223図 SD14出土遺物(4)

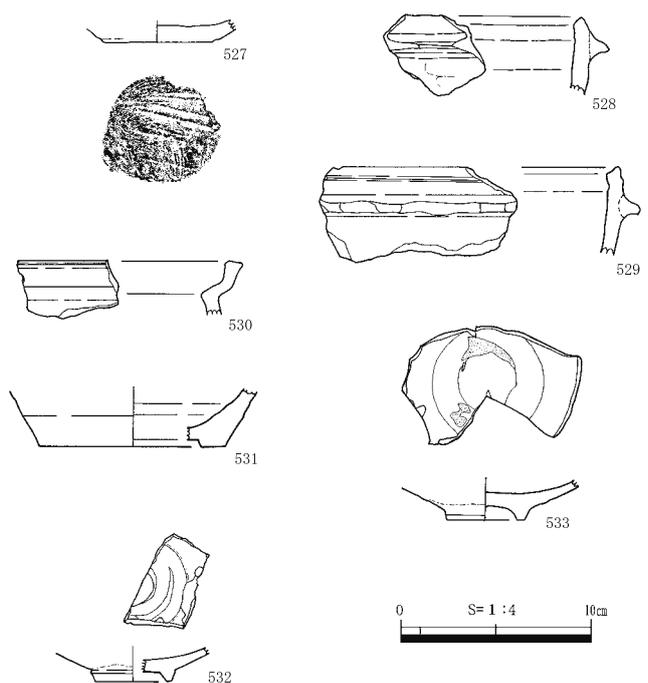
SD22(第212・225図、PL.67・68)

4区北西隅のM3・4グリッドに位置し、標高56.5mのほぼ平坦面に立地する。溝の西側は調査区外へ延び、東側でSD14に接続している。また、M3グリッドでSD21を掘削している。

検出した範囲では、全長14.8m以上、幅0.66～1.24m、深さ0.16～0.19mを測り、ほぼ東西に直線的に走る。断面U字状を呈す。底面の標高は西端で56.4m、東端で56.3mとなり、ごく緩やかに東側へ傾斜している。

埋土は、灰褐色土の単層である。

出土遺物は、土師質土器小皿534、施釉陶器小型壺535、陶器碗536、椀形鍛冶滓F208を図化している。534は、14世紀ごろのものであるが、その他の遺物は近世以降のものである。



第224図 SD16出土遺物

出土遺物及びその他の遺構との関係から、SD22は近世以降圃場整備前までの用水路の可能性があり、西側は現代の用水路を挟んでSD16と接続するものと考えられる。

SD23(第212図)

3区南東部、N9グリッド、標高58.6mの平坦地に立地する。

南北に直線状に延びる素掘りの溝である。方位はN-18°-Wである。検出した長さは7.8mで、南側は調査区外へ延びる。幅は0.4~0.5m前後で、北端が1.4mとやや広がる。深さは0.05~0.1mと浅く、断面形は皿状を呈する。

埋土は暗褐色シルトの単層である。

遺物は出土せず、詳細な時期は不明であるが、層位から近世以降のものと考えられる。性格は不明である。

SD25(第212・226図)

3区南側、O8~Q8グリッド、標高58.7mの平坦地に立地する。重複関係からSD18に後出する。

SD18に内包される位置にあり、東西方向に延びる素掘りの溝である。検出した長さは24.6mで、東端は削平により遺存していない。方位はN-81°-Eある。深さは0.2mで、断面形は逆台形を呈する。

埋土は黒褐色土の単層で、流水の痕跡は窺われない。

埋土中から須佐焼播鉢537が出土している。

出土遺物から、近世以降と考えられる。性格は不明である。

SD26 (第212・227図)

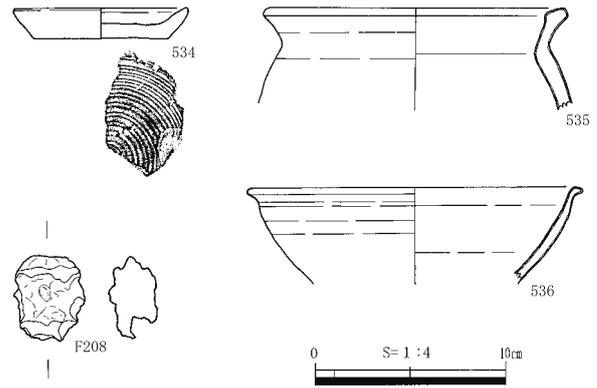
1区中央部分Z3~Z6グリッドに位置し、標高52.0~53.0mの西側斜面部に立地する。

斜面部をカットし鋸状に走る溝で、長さ28.5m、幅1.0~1.65m、深さ0.43~0.76mを測る。両端部は斜面側に延びる様子が窺えるが、いずれも流失している。

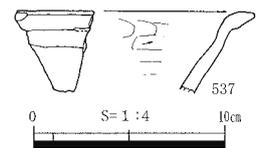
埋土は、暗褐色土の単層である。

出土遺物には、埋土中から出土した青磁碗538がある。龍泉窯系碗D類に分類でき15世紀ごろを示すが、この遺構に伴うものではなく、混入したものと考えられる。

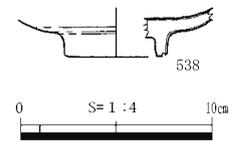
図化はしていないが、埋土中からは近世以降の陶磁器類等も出土しており、SD26は近世以降のものと考えられる。用途は不明である。



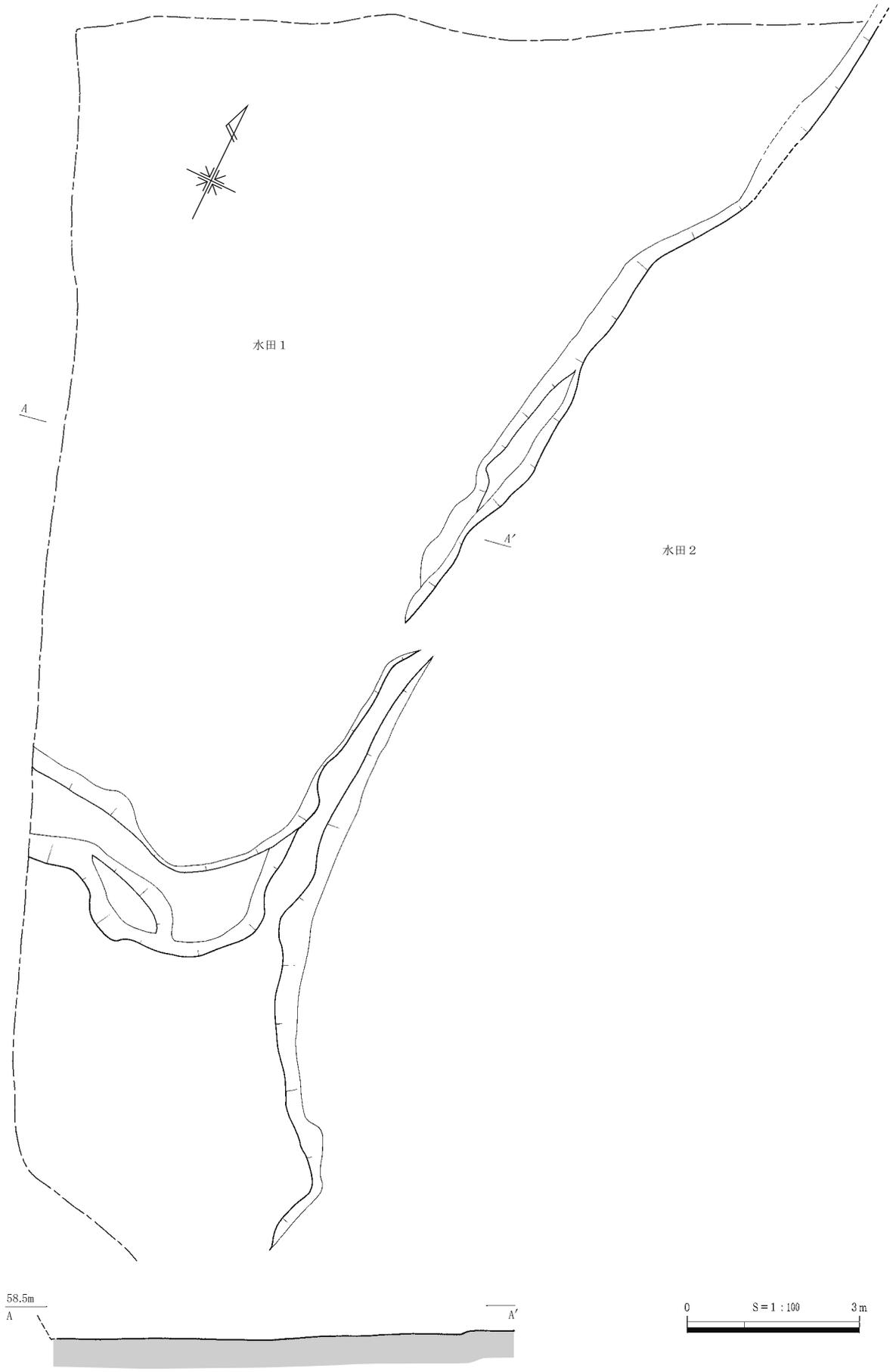
第225図 SD22出土遺物



第226図 SD25出土遺物



第227図 SD26出土遺物



第228図 水田1・2

#### 4 水田跡

##### 水田1・2(第228図、PL.34)

4区西側のJ8・9、K8・9グリッドに位置し、標高57.9～58.3mのほぼ平坦面に立地する。4区谷部に堆積する灰褐色土を除去した段階で検出することができた。

遺存状態は悪く、少なくとも2枚の水田があったものと推測される。ここでは、調査区際で検出したものを水田1、畦を挟んでSD14側のものを水田2とする。

水田1は、南北15m以上、東西12m以上、面積114.8㎡以上を測る。南東隅で、段状に掘り込みがある。

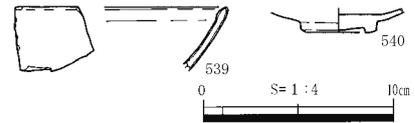
水田2の遺存状態は悪く、南北15m以上を測り、東西範囲は明確にすることはできなかったが、SD14の間でおさまるものと推測される。

水田1と水田2の間には、幅40cm程度、高さ4cm程度の狭い畦が認められるが、北側は検出することができなかった。

出土遺物は図化できたものはなかったが、検出層位が近世以降の包含層である灰褐色土を除去する段階で、黒褐色土を掘り込むように検出されていることから、近世以降のものと推定される。

##### 5 1区整地土(第212・229図、PL.71)

1区平坦部南側部分で検出された、整地土層中から出土した遺物について述べる。この整地土は表土下で検出したもので、砂混じりの褐色系のよく締まる土層で、東側は薄い、西側斜面部になるにつれて厚くなっている。厚い所で約40cmにもなる。



第229図 1区整地土出土遺物

図化した遺物は、龍泉窯系青磁碗B2類の539、白磁皿D群の540である。これらは、中世の遺物で、混入品である。

図化はしていないが近世以降の遺物も包含していることから、整地された時期は近世以降と考えられる。

#### 6 包含層遺物

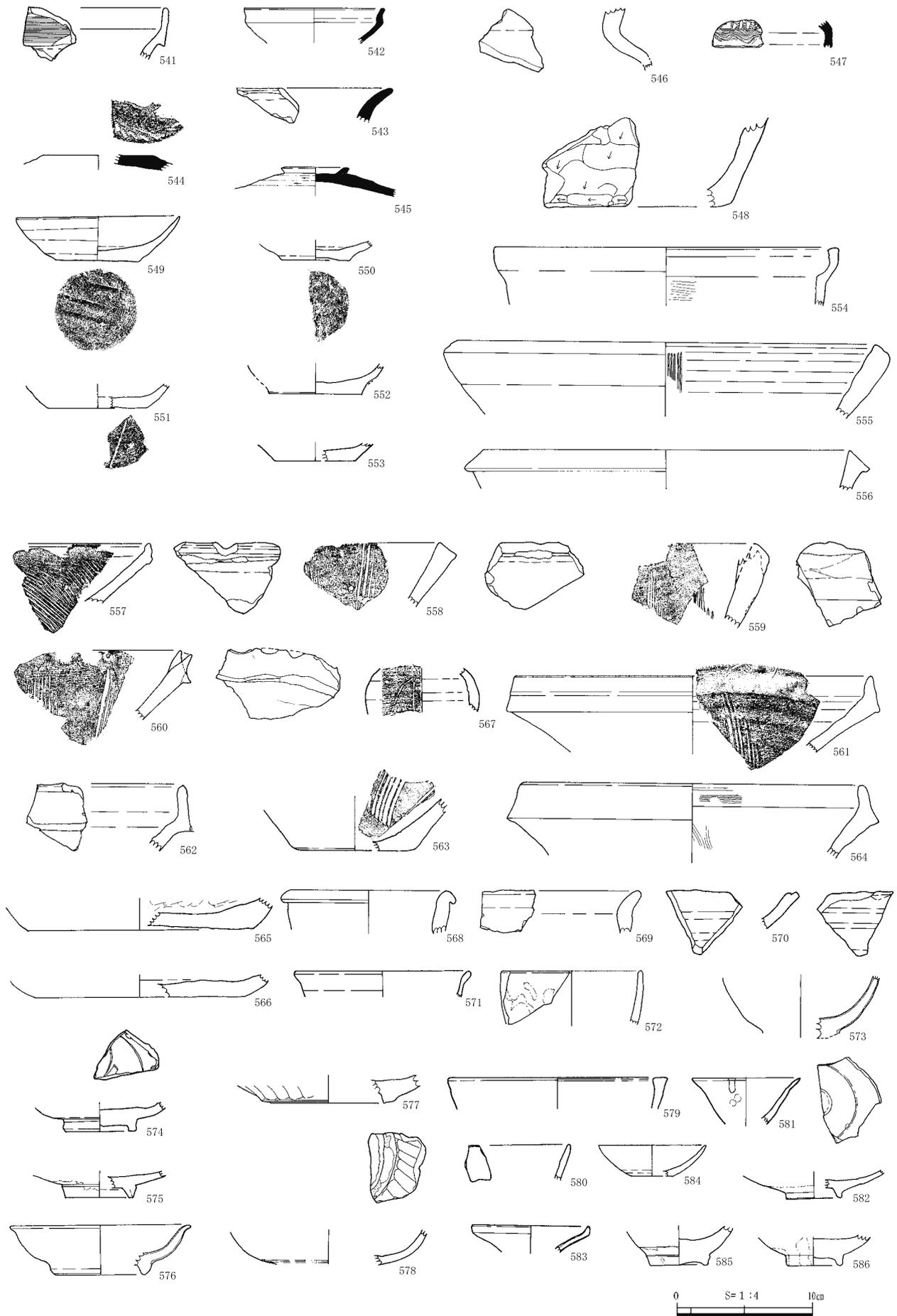
##### 3区近世以降遺物包含層出土遺物(第230・231図、PL.64・66・69～73)

3区の北東側谷部に堆積している遺物包含層のうち、近世以降の遺物包含層(灰褐色土、褐灰色土)から出土した遺物について述べる。この層は、造成土下で検出された包含層である。

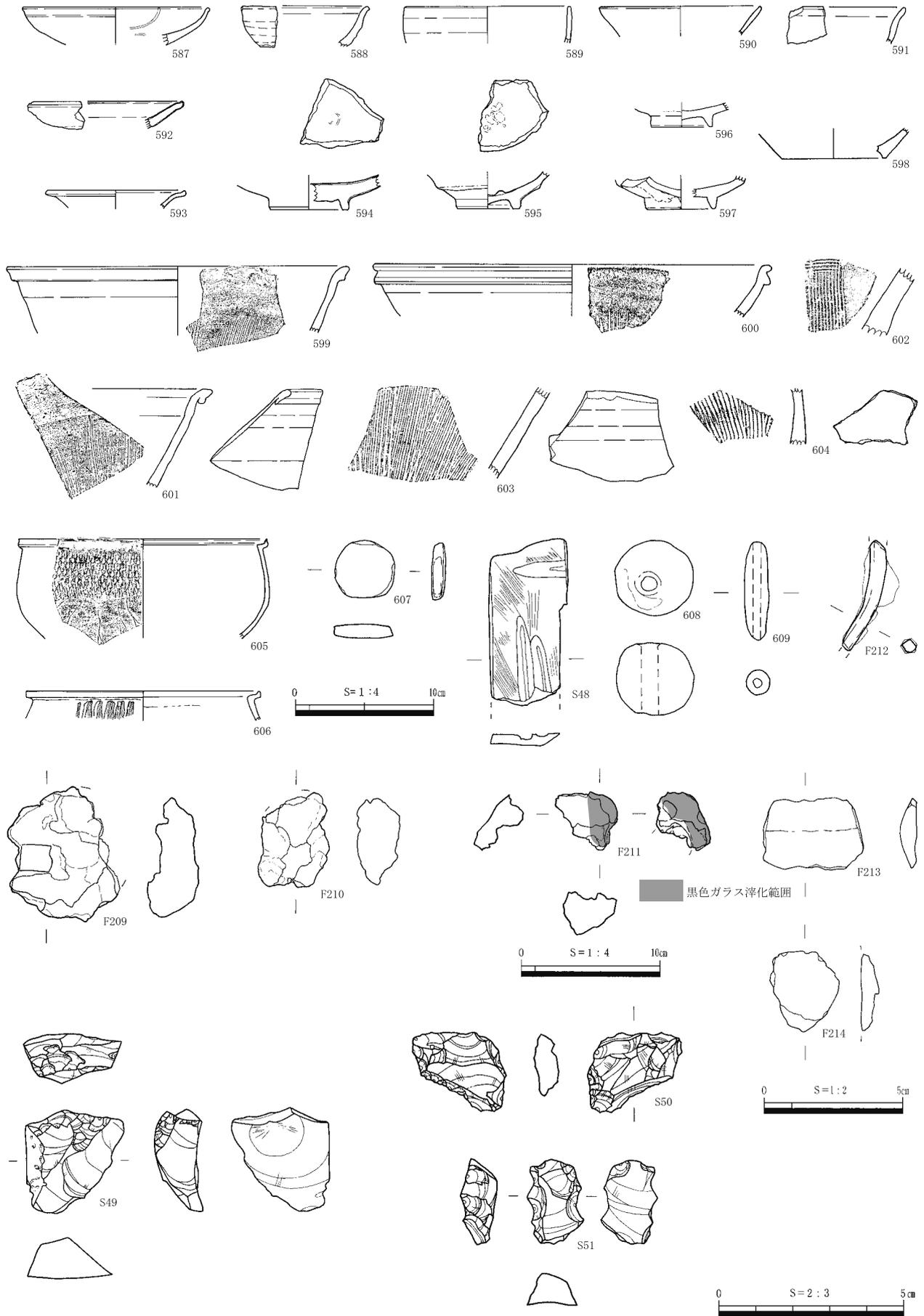
541は弥生土器甕で、弥生V-3様式、弥生時代後期後葉に比定される。

542～547は古墳時代終末から古代に比定される土器である。542は須恵器坏、543は須恵器甕、544・545は須恵器坏蓋で、545は輪状つまみが付く。546は須恵器壺、547は須恵器碌である。

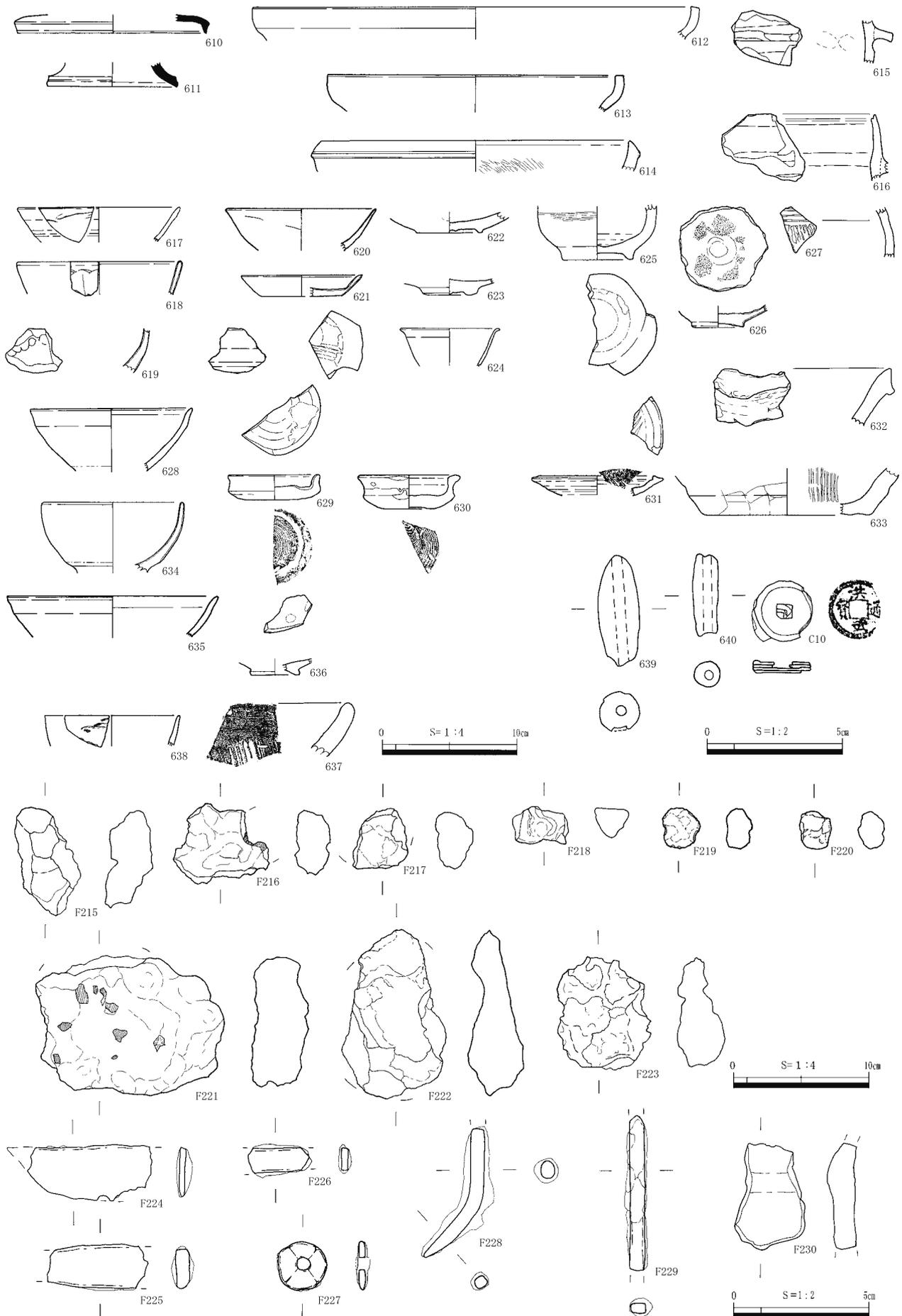
549～588は中世に比定される土器、陶磁器類である。549～554は土師質土器で、549～553が坏、554が鍋である。555～568は備前焼である。555～564は播鉢で、555は重根編年ⅢA期、558はⅢB期、その他はⅣA～ⅣB期に該当するとみられる。568は壺の口縁部破片で、ⅣB期と考えられる。569は産地不明の陶器甕である。570は越前焼播鉢で口縁端部に段を持ち凹線状に窪むもので、木村編年Ⅲ-2新期～Ⅳ1期に該当する。571～580は青磁である。571～575はいずれも龍泉窯系碗で、571～573・578は青磁碗DかE類、574はI類である。576は青磁小碗Ⅲ類と考えられる。577は端反皿である。581・582・588は白磁で、581は小坏、582・588は碗である。581は森田分類E群の小坏である。582は



第230図 3区近世以降遺物包含層(灰褐色土)出土遺物(1)



第231図 3区近世以降遺物包含層(灰褐色土)出土遺物(2)



第232図 4区近世以降遺物包含層(灰褐色土)出土遺物

碗V類で、内面見込み部の釉を輪状に掻きとるものである。583は中国製瓶である。584～586は瀬戸・美濃焼碗である。

548・587・589～606は近世以降に比定される陶磁器類である。599～604は須佐焼播鉢、605・606は陶器である。

土製品のうち、607は須恵器片を円形に再加工したもので、紡錘車の未成品の可能性がある。608は土玉、609は土錘である。

石器のうち、S48は流紋岩製の玉砥石である。S49・S51は側縁に二次加工のある剥片で、S50は扁平な石核である。S49～S51はいずれも黒曜石製である。

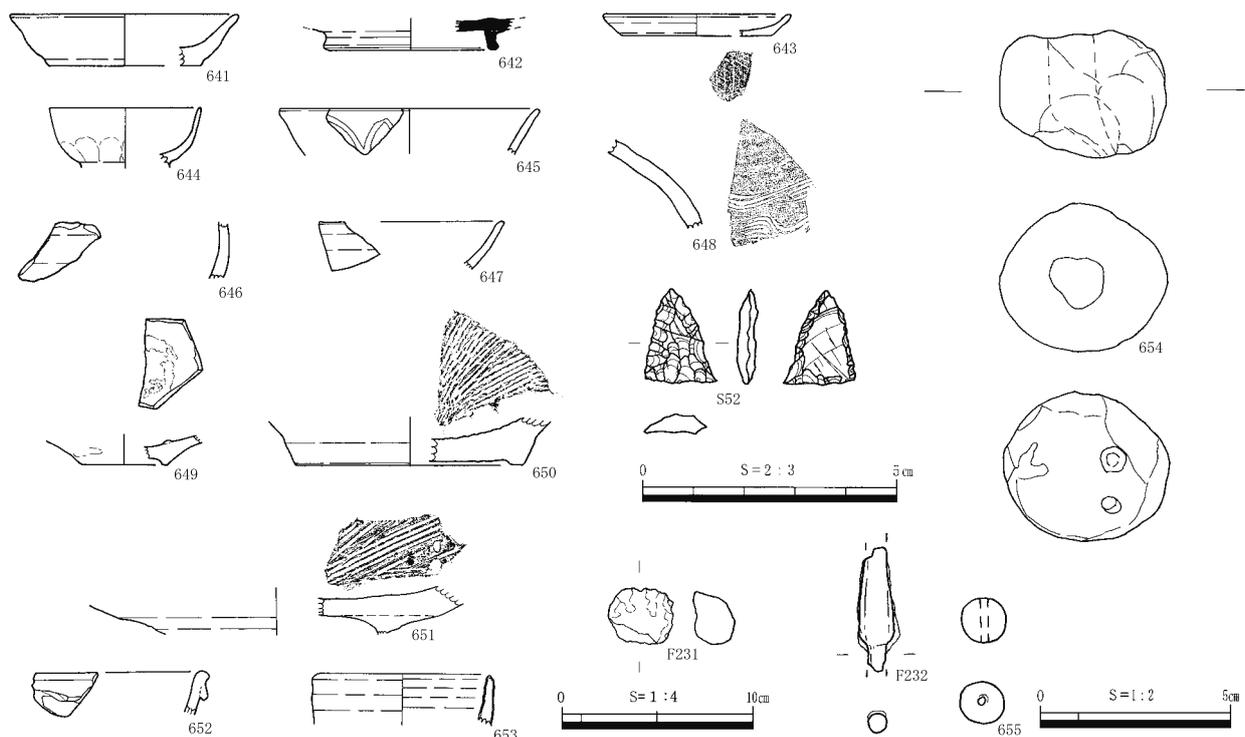
鍛冶関連遺物のうち、F209・F210は椀形鍛冶滓、F211は羽口で、先端部が黒色ガラス質に滓化している。F212は鉄鏃と思われる。F213・F214は鑄鉄鍋片である。F213は受け口の口縁部破片で、F214は底部破片である。鍛冶関連遺物はいずれも中世に帰属する資料である可能性が高い。

#### 4区近世以降遺物包含層出土遺物(第232図、PL.71)

主に4区谷部に堆積している遺物包含層のうち、近世以降の遺物包含層(灰褐色土、褐灰色土)から出土した遺物について述べる。この層は、造成土下で検出された包含層である。

610・611は奈良時代の遺物で、610は須恵器坏蓋、611は須恵器高坏脚部である。

612～634は中世の遺物である。612は土師質土器鍋、613は瓦質土器鍋、614は瓦質土器播鉢、615は瓦質土器羽釜、616は土師質土器羽釜、617～619は青磁碗で、617は龍泉窯系碗C2類、618は龍泉窯系碗B4類、619は龍泉窯系碗I類である。620・623は白磁碗で、621・622は白磁皿で、622は白磁皿DかE類である。624は白磁小坏で白磁E群である。625～627は朝鮮陶器碗である。628は古瀬戸後期Ⅲ期の瀬戸窯製品の天目茶碗、629・630は瀬戸窯製品香炉で、629は古瀬戸後期Ⅲ期、630は古瀬戸



第233図 4区造成土出土遺物

後期Ⅳ期である。631は古瀬戸後期Ⅲ期の瀬戸窯製品卸皿、634は古瀬戸後期Ⅲ期の瀬戸窯製品碗である。632・633は備前焼播鉢で、632は重根編年ⅣA期である。

635～637は近世以降の遺物で、635は陶器碗、636は磁器、637は陶器播鉢、638は染付け椀である。

土錘 639・640 は中世以降のものと考えられる。

その他、洪武通寶を含む4枚の古銭が付着したC10、椀形鍛冶滓F215～F217、F221～F223、流動滓F218、鍛冶滓F219・220、刀子F224～F226、飾り釘F227、皆折れ釘F228、棒状鉄製品F229、鑄鉄鍋口縁部片F230がある。

これらの時期は、古代から近世以降にかけてのものである。この包含層は、近世以降の時期にあたり、古い時期の遺物が混入した状態で検出されたものと考えられる。

#### 4区造成土出土遺物(第233図、PL.64・66・72)

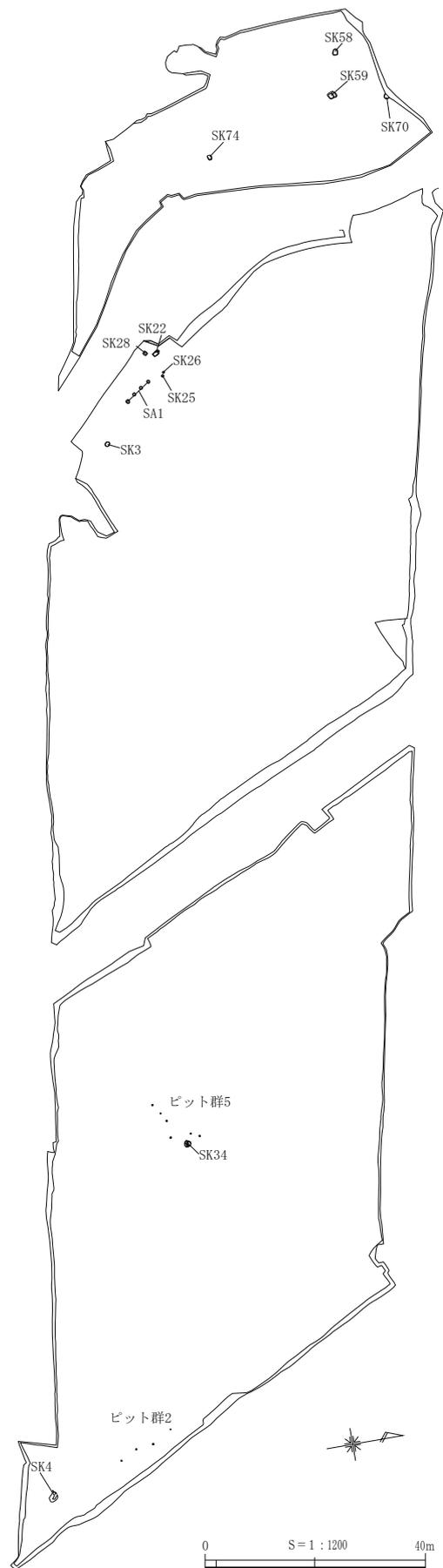
造成土は、3区から4区全域に亘って検出され、昭和50年代の圃場整備に伴うもので、地形を均すために施されたもので、耕作土下で検出され、厚さ1mを超える箇所もある。ここでは、造成土中から出土して遺物について触れることとする。

642は奈良時代の須恵器高台坏である。

641・643～648は中世の遺物で、641は土師質土器坏、643は土師質土器小皿、644は白磁小型碗である。645は龍泉窯系碗B2類の青磁碗、646は大窯前半期の瀬戸・美濃焼天目茶碗である。647は青白磁碗、648は備前焼壺である。

649～653は近世以降の遺物で、649は陶器碗、650・652は須佐焼播鉢、651は陶器播鉢、653は肥前陶器である。

その他、時期不明の手捏ね土製品654、数珠玉656、縄文時代の黒曜石製石鏃S52、砂鉄焼結塊F231、鉄鏃と思われるF232がある。



第234図 時期不明遺構分布図

第8節 時期不明の遺構

1 柵列

SA 1 (第235図、表34、PL.33)

3区南西側のV6グリッドにあり、標高57.1m付近の平坦面に立地する。約3m西には、SB4・5がある。

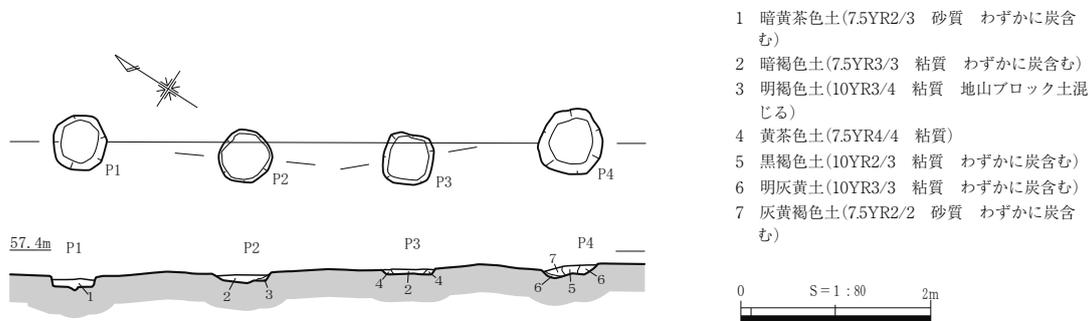
検出面は大きな削平を受けており、遺存状態は悪い。南北に一直線に並ぶ3間分を検出した。柱穴の径は0.6～0.7m、深さ約0.1m程度である。柱穴間はそれぞれ約1.7mである。主軸はN-34°-Wである。P4で柱痕跡を確認した。復元される柱径は、約20cmである。

埋土は、暗褐色土系の計7層に分層できた。

出土遺物はなく、時期は不明である。

表34 SA 1 ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	55×60-12	
P 2	57×57-11	
P 3	52×55-8	
P 4	65×70-10	柱痕径20cm



- 1 暗黄茶色土(7.5YR2/3 砂質 わずかに炭含む)
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3 粘質 わずかに炭含む)
- 3 明褐色土(10YR3/4 粘質 地山ブロック土混じる)
- 4 黄茶色土(7.5YR4/4 粘質)
- 5 黒褐色土(10YR2/3 粘質 わずかに炭含む)
- 6 明灰黄土(10YR3/3 粘質 わずかに炭含む)
- 7 灰黄褐色土(7.5YR2/2 砂質 わずかに炭含む)

第235図 SA 1

2 土坑

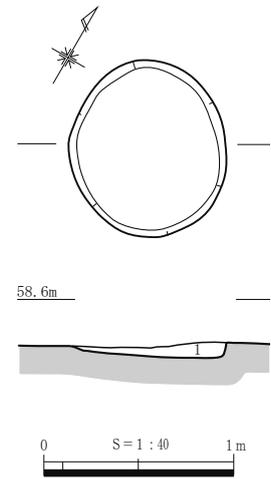
SK 3 (第236図)

3区北西側のU7グリッドにあり、標高56.1mの平坦地に立地する。

長軸0.92m、短軸0.84mの平面が円形を呈する土坑で、検出面から土坑底面までの深さは8cmを測る。遺構上部は削平により大きく失われており、残存深度は浅い。底面は平坦である。

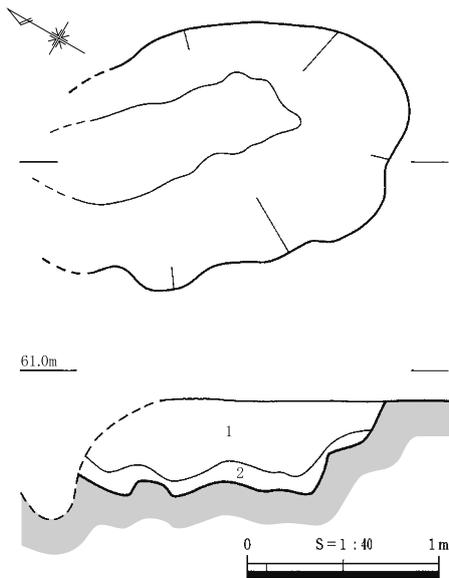
埋土は黒褐色シルトを主体とした土が堆積する。

遺物は出土しておらず、時期及び性格は不明である。



- 1 黒褐色土(10YR2/2 シルト)

第236図 SK 3



- 1 黒色土(10YR2/1 径1～2cmの地山粒少含、しまりややあり、粘性ややあり)
- 2 褐灰色土(5YR4/1 暗褐色土ブロック状含、しまりあり、粘性ややあり)

第237図 SK 4

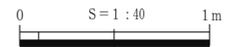
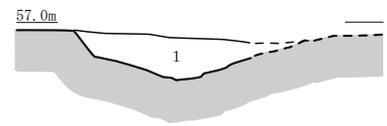
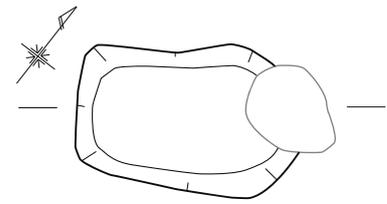
SK 4 (第237図、PL.34)

4区南東側のB11グリッドにあり、標高約60.8m付近の緩斜面に立地する。

平面は、北側が失われているため推定となるが、長楕円形を呈するものと思われる。長軸は2.0m以上、短軸は1.26mを測る。検出面からの深さは最大で0.52mを測る。南側の壁面には段が認められ、底面は不整形である。

埋土は、黒色土を主体として2層確認された。

本遺構の時期及び性格については、出土遺物がなかったため不明である。



1 茶褐色土(10YR2/2 シルト)

**SK22(第238図)**

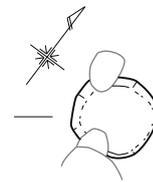
3区南西側のV6グリッドにあり、標高56.9m付近の平坦面に立地する。

平面は隅丸長方形を呈し、東辺は攪乱を受ける。長軸1.1m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。

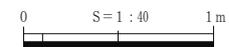
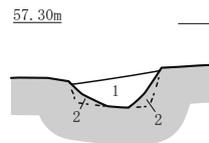
埋土は褐色土の単層である。また、埋土中から10～25cmの礫が出土した。

出土遺物はなく、時期及び性格は不明である。

**第238図 SK22**



1 淡灰褐色土(10YR3/4 砂質 細かい地山ブロック土混じる)  
2 地山土



**第239図 SK25**

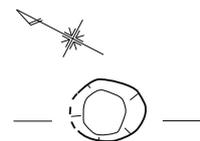
**SK25(第239図、PL.34)**

3区南西側のV6グリッドにあり、標高57.0～57.1m付近の平坦面に立地する。

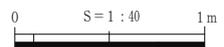
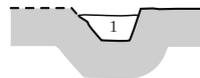
平面は円形を呈し、径約0.45m、深さ約0.2mを測る。

埋土は淡灰褐色土の単層である。

出土遺物はなく、遺構の時期及び性格は不明である。



57.20m



1 暗灰褐色土(7.5YR2/3 砂質)

**SK26(第240図)**

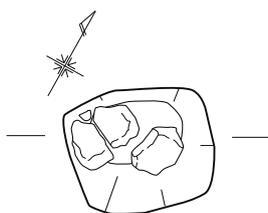
3区南西側のV6グリッドにあり、標高56.9m付近の平坦面に立地する。

平面は楕円形を呈し、長軸0.4m、短軸0.35m、深さ0.18mを測る。

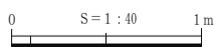
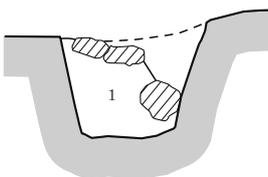
埋土は、暗灰褐色土の単層である。

出土遺物はなく、遺構の時期及び性格は不明である。

**第240図 SK26**



57.0m



1 暗褐色土(10YR3/4 粘質)

**第241図 SK28**

**SK28(第241図)**

3区V6グリッドにあり、標高56.8m付近の平坦面に立地する。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸0.75m、短軸0.65m、深さ0.6mを測る。

埋土は暗褐色土の単層で、埋土中から径約20cmの礫が出土した。

出土遺物はなく、遺構の時期及び性格は不明である。

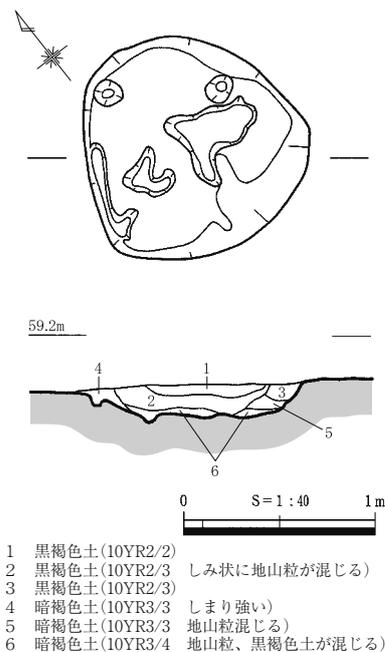
SK34(第242図)

4区H8グリッド、標高約59.0mの緩斜面で検出された。

平面形は不整形円形を呈し、径約1.2m、検出面からの深さは0.2mを測る。底面は不整形で全体に凹凸がみられる。

埋土は6層に分層でき、暗褐色から黒褐色土となっている。

遺物は出土しておらず、本遺構の時期及び性格は不明である。



- 1 黒褐色土(10YR2/2)
- 2 黒褐色土(10YR2/3) しみ状に地山粒が混じる)
- 3 黒褐色土(10YR2/3)
- 4 暗褐色土(10YR3/3) しまり強い)
- 5 暗褐色土(10YR3/3) 地山粒混じる)
- 6 暗褐色土(10YR3/4) 地山粒、黒褐色土が混じる)

第242図 SK34

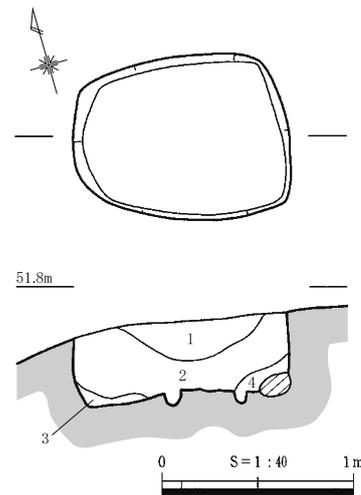
SK58(第243図、PL.34)

1区北側のa2グリッドに位置し、標高51.6m付近の緩斜面に立地する。

平面は不整形楕円形を呈し、長軸1.13m、短軸0.86m、深さは最大で0.42mを測る。断面は、ほぼ長方形を呈し、底面は御来屋礫層になるため凹凸に富んでおり、円礫などもみられた。

埋土は、黒色土を主体とし、4層がレンズ状に堆積している。

遺物が出土しておらず、本遺構の性格や時期は不明である。



- 1 黒褐色土(10YR2/2)
- 2 黒色土(10YR1.7/1) 中央ビット付近に2cm以下の地山ブロックを含む)
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 1cm程度の地山ブロックを含む)
- 4 暗褐色土(10YR3/3)

第243図 SK58

SK59(第244図、PL.34)

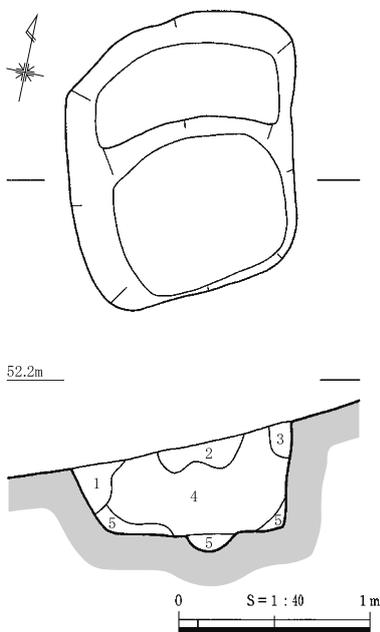
1区北側のZ2グリッド西端に位置し、標高51.8m付近の緩斜面に立地する。

平面は不整形長方形を呈し、長軸1.50m、短軸1.18m、深さは最大で0.58mを測る。断面は、東側に比べ西側の壁がなだらかなため、不整形台形状を呈す。底面は御来屋礫層のため、凹凸に富むが、北側の底面は南側に比べ高く、テラス状になる。

木の根の攪乱などを受けて

いるが、埋土は黒色土を主体としている。

遺物が出土しておらず、時期及び性格は不明である。



- 1 暗褐色土(10YR3/2)
- 2 黒褐色土(10YR1.7/1)
- 3 褐色土(7.5YR4/6)
- 4 暗褐色土(10YR3/4)
- 5 暗褐色土(10YR3/3) しまり弱い)

第244図 SK59

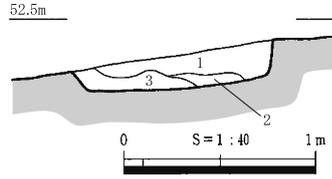
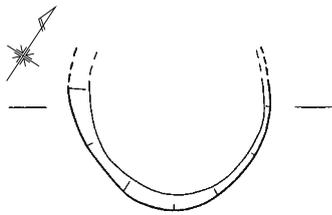
SK70(第245図)

1区北側のZ1グリッドに位置し、標高約52.3mの斜面部に立地する。調査区際に位置するため、北側の部分は不明であるが、

平面は楕円形を呈すと考えられ、長軸1.07m、短軸0.82m以上を測る。底面までの深さは最大で0.18mを測る。

埋土は、炭化物、焼土粒を含む黒褐色系の埋土を3層確認した。

遺物が出土しておらず、時期は不明である。埋土の状況から製



- 1 黒褐色土(10YR2/3 2mm以下の地山粒・炭化物少含、粘性弱、しまり弱)
- 2 黒褐色土(10YR3/1 炭化物含)
- 3 黒褐色土(10YR2/3 2cm以下の地山ブロック含)

第245図 SK70

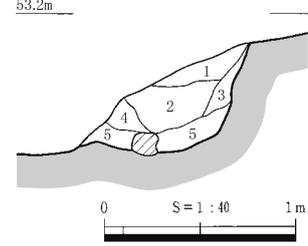
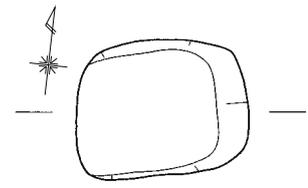
埋土は5層確認し、底面には長軸12cm程の角礫が検出された。  
遺物は出土しておらず、詳細な時期、性格は不明である。

炭土坑の可能性が考えられる。

SK74(第246図、PL34)

1区中央のZ4グリッドに位置し、標高約52.6～53.0mの斜面部に立地する。SD26によって上部を大きく削平されているため、全体の形状は不明である。

平面は、残存している部分では隅丸方形を呈し、長軸0.89m、短軸0.68m、底面までの深さは最大0.44mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、断面は長方形を呈す。



- 1 黒褐色土(10YR3/2)
- 2 黒褐色土(10YR3/1 地山粒、炭化物含)
- 3 黒褐色土(10YR3/1 地山粒僅含)
- 4 黒褐色土(10YR3/1 褐色シルトブロック含)
- 5 黒褐色土(10YR3/1 地山粒・地山ブロック・炭化物僅含)

第246図 SK74

3 ピット群

ピット群2(第247図、表35)

4区東側のB10、C9・10グリッド、標高59.9～60.1mの平坦面に立地する。計4基のピットで構成される。

建物となるような並びは確認できなかった。  
埋土は、暗褐色から黒色土である。柱痕等は確認されなかった。  
遺物は出土しておらず、本遺構の時期及び性格は不明である。

表35 ピット群2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	16 × 14 - 30	
P2	28 × 24 - 18	
P3	22 × 20 - 39	
P4	25 × 20 - 36	

ピット群5(第248図、表36)

4区南側のH・I8グリッド、標高58.1～59.0mの谷部の傾斜面に立地する。

計7基のピットで構成される。建物となるような並びは確認されなかった。  
埋土は黄褐色、褐色から黒色土となっている。柱痕等は確認されなかった。

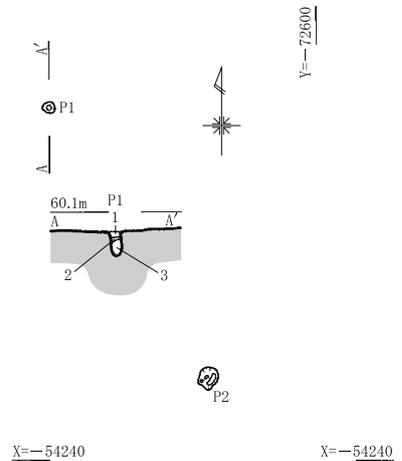
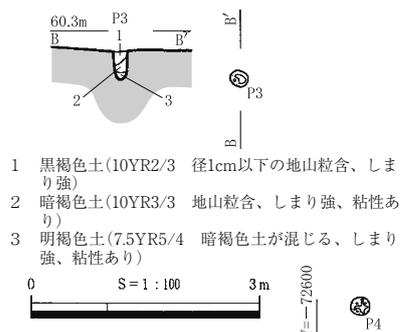


表36 ピット群5ピット一覧表

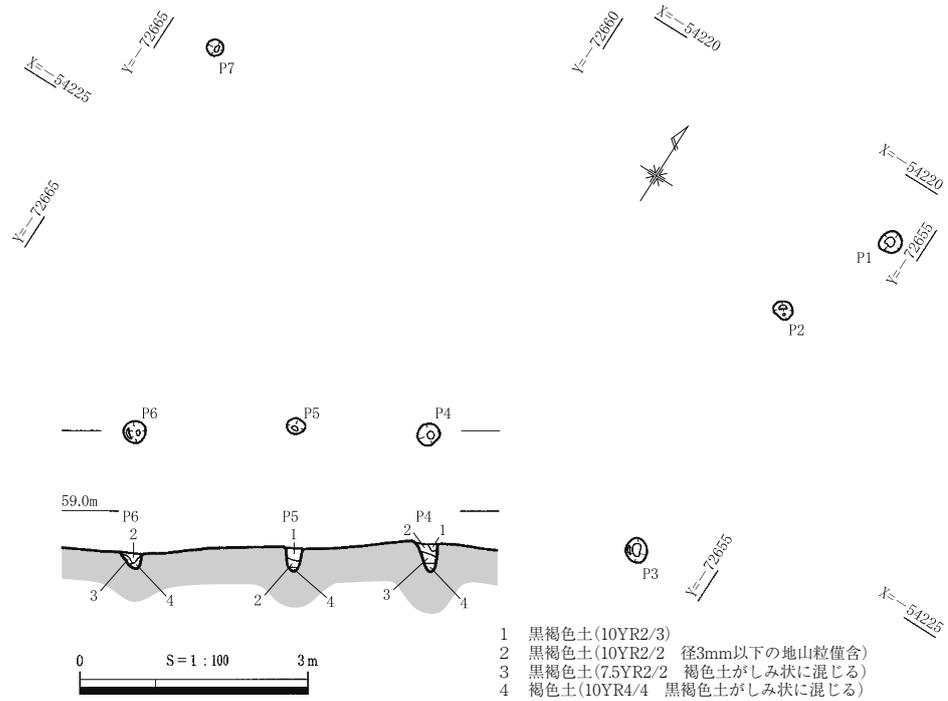
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	31 × 26 - 22	
P2	24 × 22 - 16	
P3	32 × 17 - 17	
P4	30 × 26 - 38	
P5	22 × 20 - 26	
P6	28 × 27 - 22	
P7	22 × 20 - 26	



- 1 黒褐色土(10YR2/3 径1cm以下の地山粒含、しまり強)
- 2 暗褐色土(10YR3/3 地山粒含、しまり強、粘性あり)
- 3 明褐色土(7.5YR5/4 暗褐色土が混じる、しまり強、粘性あり)

第247図 ピット群2

遺物は出土しておらず、本遺構の時期は不明である。性格も不明であるが、一部に並ぶ様子がみられ、柵などになる可能性がある。



第248図 ピット群5

### 第9節 遺構外出土遺物について

#### 1 3区遺構外一括遺物(第249図、PL.65・70・73)

3区の出土層位が不明の遺物について触れることとする。

656～659は古代に比定される土器である。656・657は須恵器坏蓋で、656は輪状つまみを持ち、657にはかえりがつく。658・659は焼塩土器で、椀形を呈し、口縁部が内傾するタイプで、内外面に指頭圧痕が施される。

660～683は中世に比定される土器、陶磁器類である。660～667は土師質土器小皿で、668～672が土師質土器坏である。673は瓦質土器羽釜、674は勝間田・亀山系の甕、682・683は備前焼播鉢で、682は重根編年IVB類、683は重根編年VA類と考えられる。675・676は白磁皿Ⅸ類で、口禿げのものである。677～681はいずれも龍泉窯系青磁碗で、677がD類、678がB2類、679がB1類に該当する。

684～690は近世以降に比定される資料である。684・685は須佐唐焼播鉢、686は陶器皿、687・688は陶器碗、689は見込みに文様が入る陶器片、690は陶器播鉢である。

S53は流文岩質凝灰岩製の砥石であるが、帰属時期は不明である。F233・F234は鉄釘で、中世に帰属する資料と考えられる。

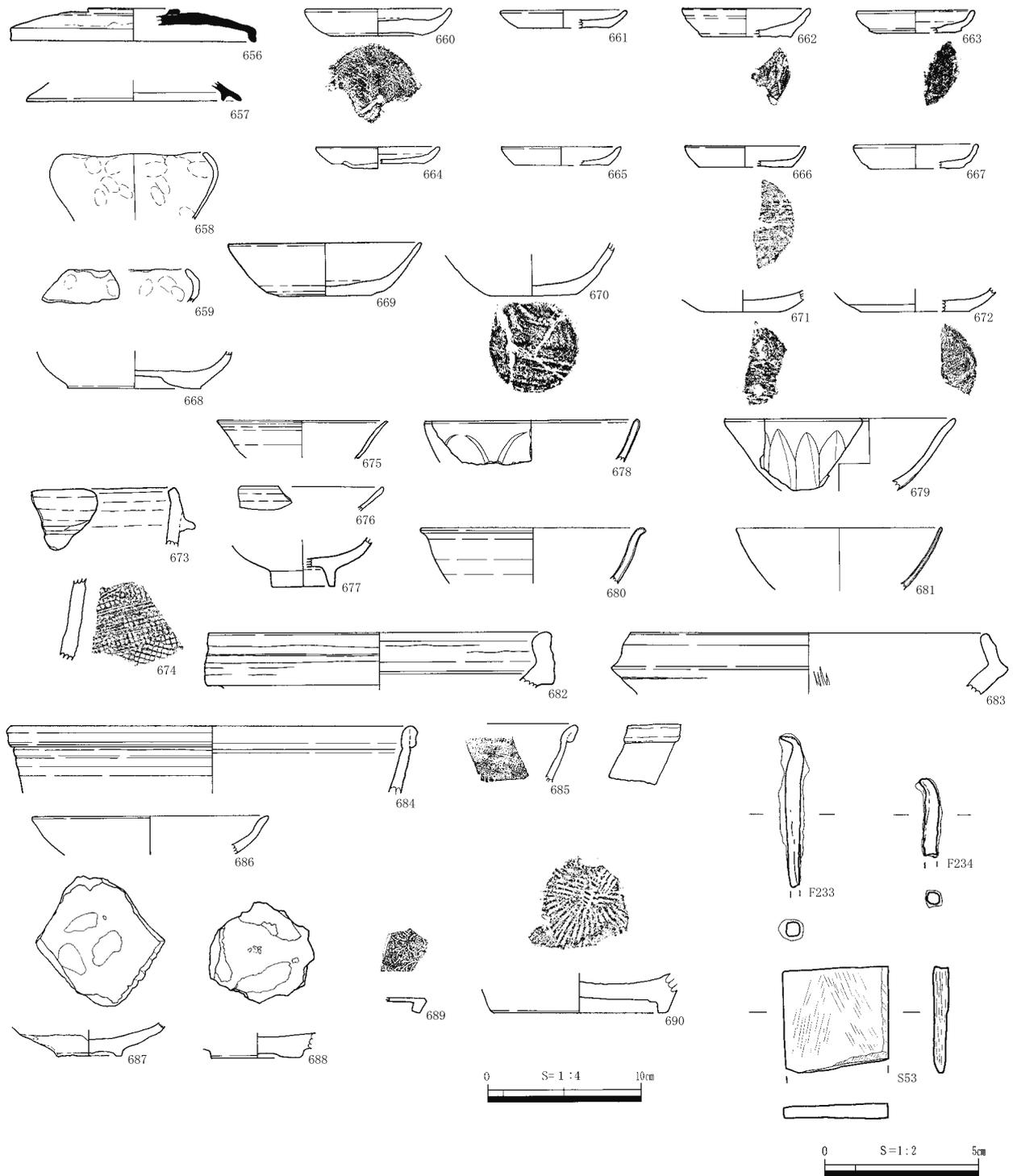
#### 2 4区遺構外一括遺物(第250図、PL.66・72)

4区の出土層位が不明の遺物について触れることとする。

691・692は弥生V-3様式、弥生時代後期後葉の弥生土器甕である。

693・694は古代の遺物で、693は土師器坏、694は須恵器杯蓋である。

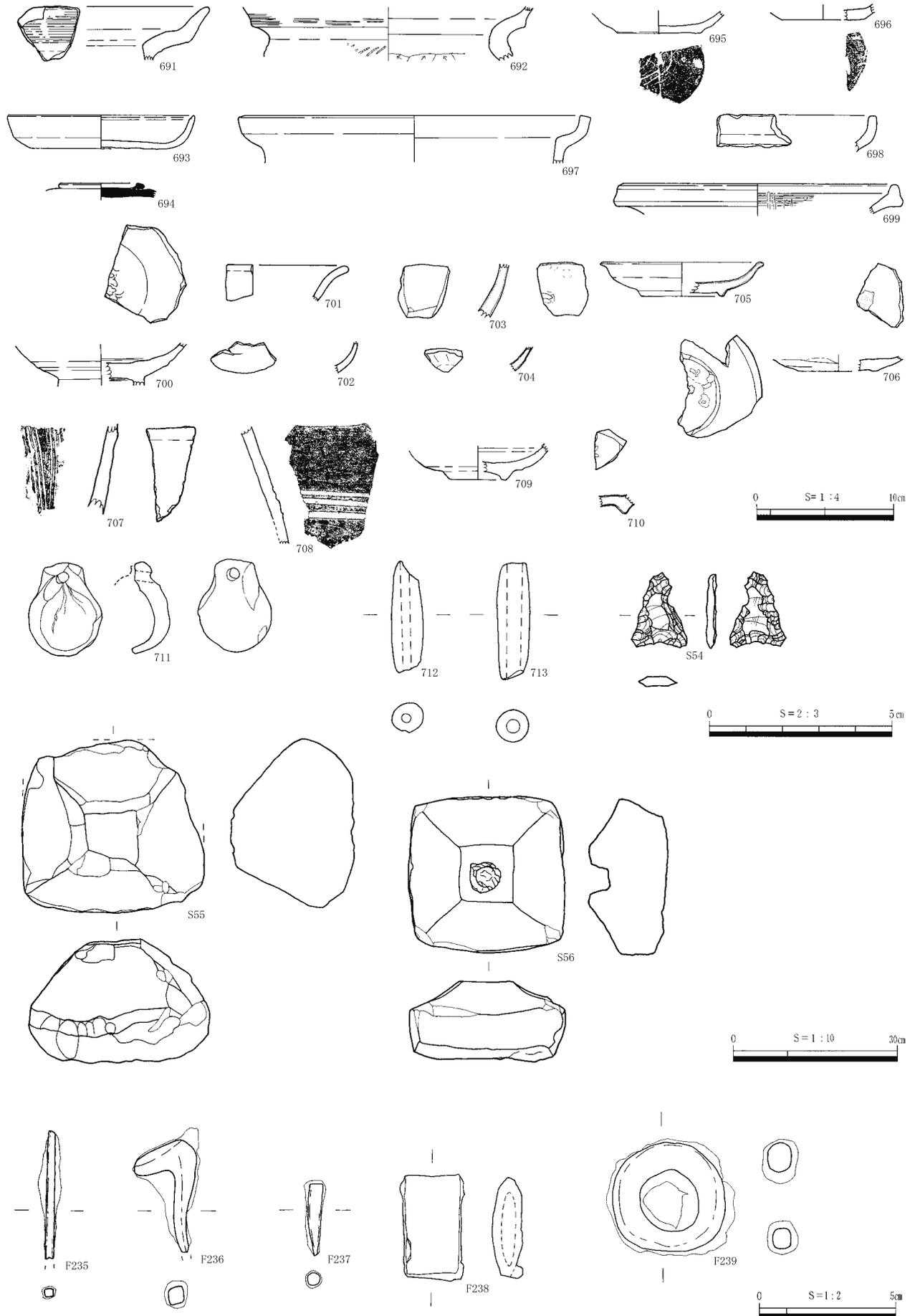
695～706は中世の遺物で、695・696は土師質土器坏、697・698は土師質土器鍋、699は土師質土器播鉢である。700～704は青磁碗で、700・701は龍泉窯系碗D類、703は龍泉窯系DかE類、704は龍泉窯系碗B4類である。705は古瀬戸後期Ⅲ期の瀬戸窯製品平椀、706は瀬戸・美濃焼皿である。



第249図 3区遺構外一括遺物

707～710は近世の遺物で、707は須佐焼播鉢、708は陶器甕、709は陶器碗、710は染付け椀である。土鈴711、土錘712・713は中世ごろ、黒曜石製石鏃S54は縄文時代、五輪塔火輪S55・56は近世以降のものである。五輪塔は、4区南東側のB12グリッドの圃場整備前の用水路に落ち込んでいたものである。

その他、F235は鉄鏃、F236は平頭釘、F237は鉄釘、F238は刀装具と思われる帯状不明品、F239は環状不明品である。鉄製品は、中世に帰属するものと考えられる。



第250図 4区遺構外一括遺物